第25回今日の作家展

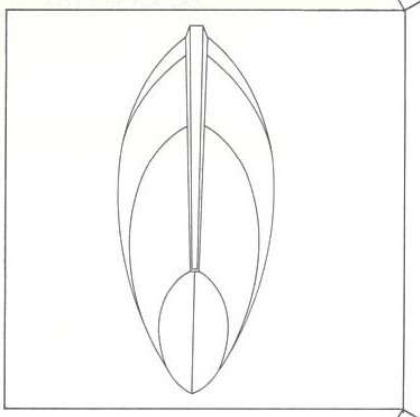
かめ座のしるし

〈KAME-ZA〉

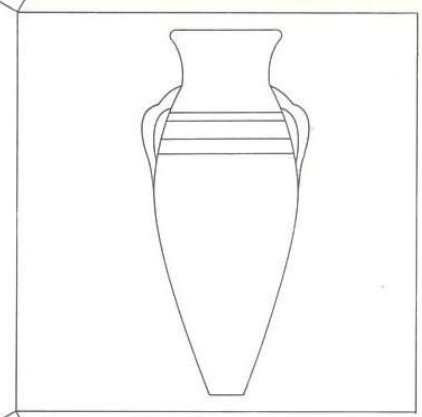
Shell and Vessel, Signifying

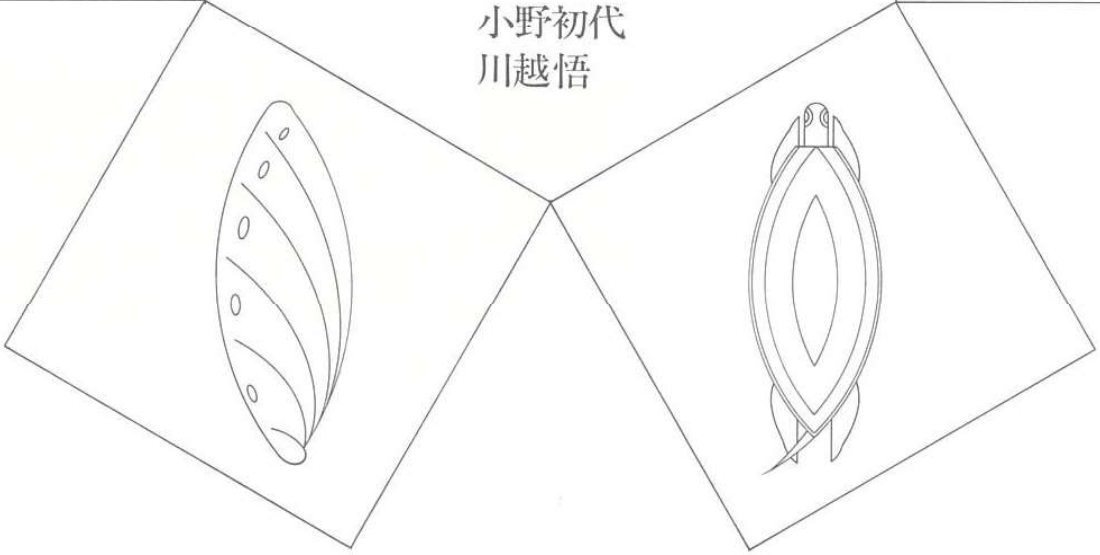
構想・構成
Conception & Direction

峯村敏明



長沢英俊
小清水漸
戸谷成雄
杉全直　黒川弘毅　草間彌生
田渕安一　橋田尚之　北辻良央
彦坂尚嘉　加茂博　野村仁
辰野登恵子　笠原たけし　大森博之
清水誠一　小泉俊己　矢野美智子
上野慶一　青木野枝　笹谷晃生
舟越直木
小野初代
川越悟





1989年11月11日[土]——11月26日[日]
AM10:00——PM6:00　11月13日[月]休館日

横浜市民ギャラリー

〈KAME-ZA〉とは何か?

あるとき私は、自分がかねてから注目していた日本の美術家の80パーセント以上が、それぞれの様式の確立期に独特の形態的暗合を示していたことに気づいた。たとえば——、

1960年、杉全直のアンフォルメル絵画のマティエールの海に六角形(きっこう)が立ち現われた。
1962年、草間彌生の無限に拡散する自己投機の要素がボート(舟)の形に凝集した。
1970年、小清水漸がモノ派の作法を脱して初めて造形意欲を見せたとき、鉄板の一端は鉋の歯のように丸形に研磨された。
1978年、彦坂尚嘉がウッド・ペインティングを始めたとき、支持体の木の箱は側面と底を鍋底形に丸く形成された。
1987年、橋田尚之の従来のアルミ板の無機的な配列の傍らに、初めて紡錘形の物体が現われた……。

これら、きっこう、ボート、鍋底、紡錘、吊鐘等の形は、他にも二十人、三十人の作例に読みとることができ、それらはおおむね、「かめ」(亀と瓶、甲殻と容器)の形成途上にあらわれるものとして要約することができるように思われた。

時間とジャンルを越えてあらわれるこの造形心理的な特徴は、歴史的・美学的に何を物語っているのだろうか。エウヘニオ・ドールスがバロック的なるもののあらわれ方を理解するのに援用した歴史的常数(アイオーン)の概念は、ここでも適用されるべきなのだろうか。

この展覧会の構想は、こうした観察と問いから始まった。発見であると同時に探索であり、確信であると同時に問いかけであり、批評であると同時に事実の提示であるような、これまでにない展覧会の型を創り出すことを、私は願っている。(1989年10月5日)

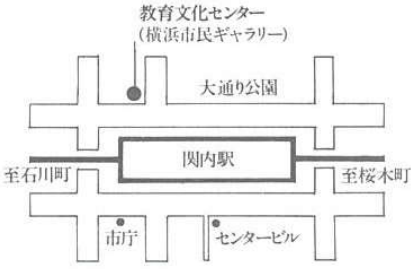
峯村敏明

三つの〈KAME-ZA〉対談

11月11日PM3:00-6:00 横浜市民ギャラリーB1アトリエ

〈草間彌生 vs 峯村敏明〉
〈戸谷成雄 vs 青木野枝〉
〈彦坂尚嘉 vs 黒川弘毅〉

オープニングパーティ
11月11日PM6:30-横浜市民ギャラリーB1アトリエ

後援 Heineken Beer

横浜市民ギャラリー
横浜市中区万代町1-1〈教育文化センター内〉
JR関内駅南口下車1分 Tel.045〈671〉3721